

21世紀教育センターニュース

平成16年(2004年)4月 第4号

■ 21世紀を生きるうえでの「21世紀教育科目」とは何か……………	1
21世紀教育センター副センター長 木村宣美	
■ 平成15年度前期21世紀教育学生アンケート調査結果の概要……………	2
■ 特集「語学教育を考える」	
教員の意見	
弘前大学の英語教育は何を目指して進んでいるのか	奥野忠徳…………… 7
ドイツ語教育の現状と進むべき道	原田悦雄…………… 7
一年生のフランス語を担当してみて	ミシェル・ジャンソン…………… 8
力となる中国語を	楊 天曦…………… 8
受講生の意見	
英語コミュニケーション実習を受けて	島 和佐…………… 8
ドイツ語を学んで	吉田晃基…………… 9
フランス語コミュニケーション実習における問題点と方向性	熊井智美…………… 9
中国語を学んで	佐藤 恵…………… 9
■ 「FD研修合宿」体験記 榊 真……………	10



21 世紀を 生きるうえでの「21 世紀教育科目」とは何か

21 世紀教育センター副センター長 木 村 宣 美

21 世紀教育科目は、教養教育科目として、「21 世紀を生きるうえでの基本的な力を養うこと」を目標に掲げています。この目標を達成するために、どうすればいいのでしょうか。真剣に考えなければならない問題です。

昨今、「ゆとりある教育」のもと、学習内容が削減され、学力が低下していることを指摘する報告を耳にすることがあります。これを裏付けるかのように、高校生の学力が低下していることを示す学力調査結果（文部科学省実施）が公表されました。また、「勉強離れ」が進んでいるという調査結果の報告もありました。知識・技能を身につけるために、勉学に励む必要はないのでしょうか。

「学力」とは何でしょうか。自ら学び自ら考える力を育むために必要な知識・技能のことではないのでしょうか。「学力」には、「課題発見能力」と「問題解決能力」が含まれます。これらの能力を育むために、知識・技能の基になると考えられる学習内容を削減しても構わないのでしょうか。知

識・技能の修得なくして、自ら課題を見つけ、問題を解決する力を育むことができるのでしょうか。知識・技能があつて初めて、自主的・自発的に様々な課題を発見し、解決することができるようになるのではないのでしょうか。知識・技能が基礎となり、その展開・発展として、自ら学び自ら考えることが可能になるのではないのでしょうか。

21 世紀教育では、導入科目（基礎ゼミナール）・技能系科目・基礎教育科目・テーマ科目という、タイプの異なる 4 つの授業科目群を配置し、自ら学び自ら考える力、「課題発見能力」・「問題解決能力」を育むことを目標に設定し、平成 14 年度から導入された教育システムです。「21 世紀を生きるうえでの 21 世紀教育科目」とは、様々な授業科目を履修して、「学力」の基盤となる知識・技能を身につけ、自ら学び、主体的に判断し、問題を解決することのできる「確かな学力」を備えた学生を育むための授業科目群です。



平成15年度前期 21世紀教育学生アンケート調査結果の概要

平成14年度4月から開始された21世紀教育の改善を目指して、初年度に引き続き21世紀教育センターが独自に企画・立案した「学生アンケート」が実施されました。

このアンケートは、21世紀教育がシステムとして機能しているかを検証し、センター全体として21世紀教育を改善していくことを目指して実施されたものです。アンケートは前期成績表と一緒に学生に配布し、後期履修科目届と共に提出するという仕方で行われました。学生が自分の成績を見た上で、成績評価の適切性などを判断できるようにするために必要な措置です。

平成15年度前期1年生に対するアンケート調査結果の概要

21世紀教育実施2年目になり、1年生では昨年度同様、入学時のガイダンスやシラバスに対する印象と反復履修及び履修人数の制限に関する意識を調査し、その実態を把握することに焦点を当てて行われました。

以下にその概要を示します。

< 所属並びに開講時のことについて >

問1) あなたの所属学部・学科・課程などは次のどれですか。

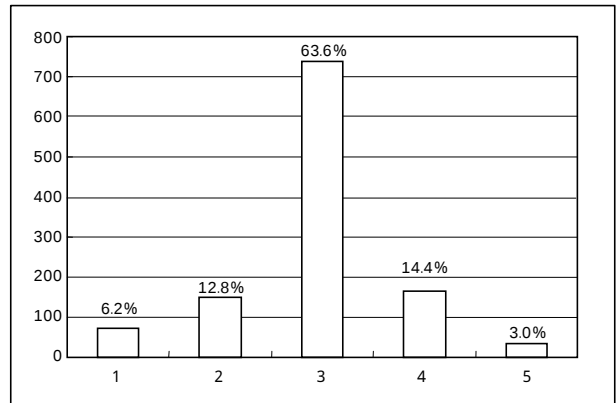
学部	人文学部	教育学部	医学部	理工学部	農学生命科学部	計
配布数	357	245	282	305	186	1375
回答数	300	220	242	252	147	1161
回答率	84.0%	89.8%	85.8%	82.6%	79.0%	84.4%

配布枚数は1375、回答数1161、回答率の平均は84.4%です。平成14年度前期の回答率が38.7%、後期の回答率が69.7%でしたのでさらに大幅に改善されました。学部別では、回答率が最も高かった教育学部と最低の農学生命科学部では約10%の違いがありました。ただ、最も低かった農学生命科学部でも平成14年度後期の最高回答率76.4%より高かったことを考えると、学生のみなさんにもアンケートの意義が浸透してきたのではないのでしょうか。

問2) ガイダンスや「履修マニュアル」を通じて、「21世紀教育」の重要性や意義を理解できましたか。

1. 充分理解できた。 2. かなり理解できた。

3. ある程度理解できた。 4. あまり理解できなかった。
5. ほとんど理解できなかった。

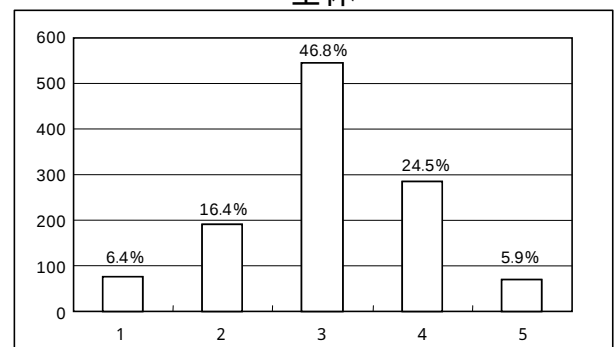


十分理解できた、かなり理解できた、ある程度理解できたを合わせると82.6%が理解できたようです。しかし、63.6%が「ある程度」としていることは、学生のみなさんが積極的に重要性や意義を理解・評価しているとは考えにくいようです。学生のみなさんにとってはどうやって単位を取るかが最重要であり、受講前或いはその後も「21世紀教育の重要性や意義」にまでは関心が及ばないのでしょうか。全体として昨年度とはほぼ同じ状況でした。

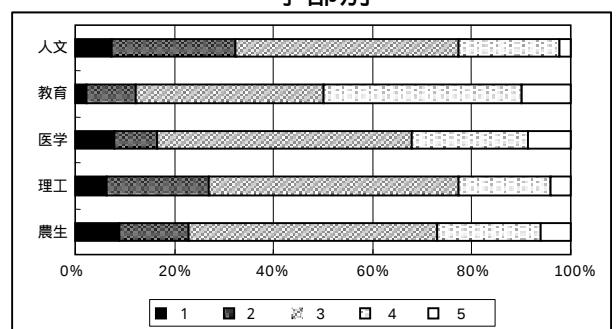
問3) 入学時のガイダンスの説明で、21世紀教育の履修のしかたがよく理解できましたか。

1. 充分理解できた。 2. かなり理解できた。
3. ある程度理解できた。 4. あまり理解できなかった。
5. ほとんど理解できなかった。

全体



学部別



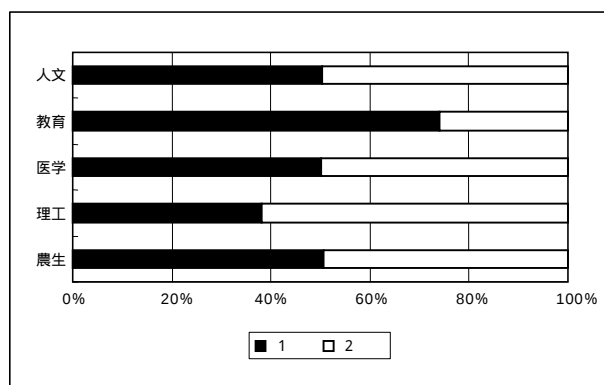
十分理解できた、かなり理解できた、ある程度理解できたを合わせると69.6%が理解できたようです。教育学部は50.0%で他学部比べてやや低い理解度でしたが、全体としては平成14年度前期（66.0%）より若干良くなったようです。

問4）「履修相談」に行きましたか。

1. 相談に行った。 2. 相談に行かなかった。

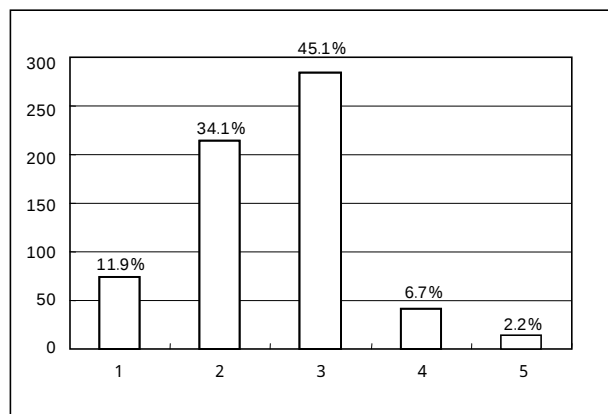
相談に行った人は38.2（理工学部）～73.4%（教育学部）でした。学部別の数字は、問3）の「理解できた」の割合と逆の傾向が見られたことから、ある程度理解できた人も含めて、理解できなかった学生のみさんの多くは履修相談を利用したようです。昨年に比べて、「理解できた」が増加した分、履修相談を利用した人は減少しました。

学部別



問5）問4）で1.とした人におたずねします。履修相談で受けた指導を履修にあたって参考にしましたか。

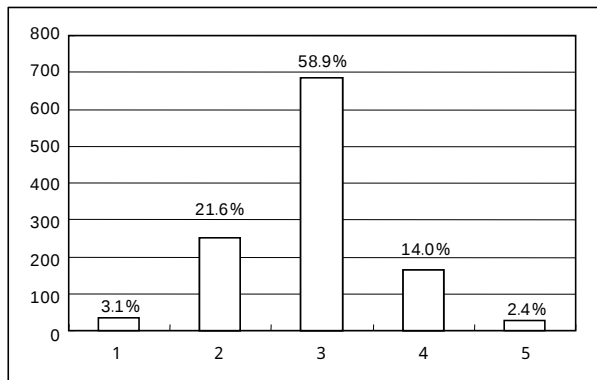
1. 大いに参考にした。 2. かなり参考にした。
3. ある程度参考にした。 4. あまり参考にしなかった。
5. ほとんど参考にしなかった。



大いに参考にした、かなり参考にした、ある程度参考にした人を合わせて、履修相談を受けた学生のみさんの91.1%が指導を参考にしました。履修相談の重要性が良くわかります。また、履修相談は非常に効果的に機能していると評価できます。

問6）「履修マニュアル」の解説はわかりやすかったですか。

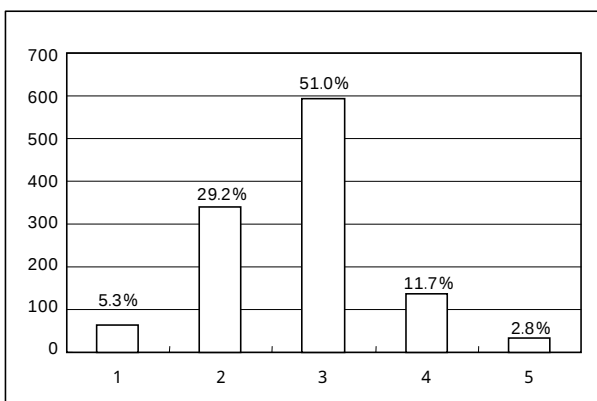
1. 充分理解できた。 2. かなり理解できた。
3. ある程度理解できた。 4. あまり理解できなかった。
5. ほとんど理解できなかった。



充分理解できた、かなり理解できた、ある程度理解できたを合わせて、83.6%がわかりやすかったと回答しました。また、問3）の履修ガイダンスにくらべて、「十分に——」と「かなり——」の比率が高くなっていることから、じっくり読んで理解できる履修マニュアルは効果的なようです。全体として昨年より学生のみさんの評価は良くなったようです。

問7）「授業計画解説」（シラバス）を読んだときの印象と実際の内容が対応している授業が多かったですか。

1. 多かった。 2. かなりあった。
3. 半分程度あった。 4. かなり少なかった。
5. ほとんどなかった。

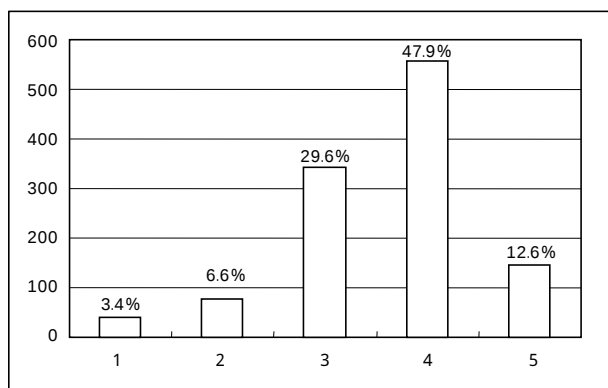


約半数（51.0%）の学生のみさんが、「シラバスの印象と実際の内容が対応しているものは半分くらいしかなかった」と評価しています。「多かった」と「かなりあった」と感じた人は34.5%で、平成14年度の前期（32.4%）とほぼ同じ、同後期（45.9%）より低下しました。昨年から全く改善が見られなかったことは反省しなければならないことです。

<基礎教育科目について>

問8）21世紀教育では、副題・内容が異なっている場合でも、授業科目名が同じであれば、同一授業の反復履修禁止と規定しています。同一授業の反復履修禁止をどう思いますか。

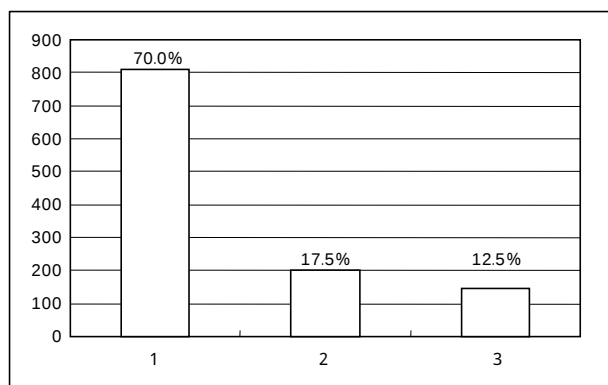
1. 非常に良い。 2. かなり良い。
3. ある程度良い。 4. あまり良くない。
5. 非常に良くない。



あまり良くない、非常に良くないとする人が60.5%を占めました。各学部とも60%或いはそれ以上の学生のみなさんが内容の異なる同一授業の反復履修を希望しており、現状には大いに不満を持っているようです。非常に良い、かなり良いは10.0%でした。できるだけ興味あるものを履修したいという希望があるためでしょう。幅広い知識・教養を身につけさせるという21世紀教育の考えと、学生のみなさんの意識にずれがあるようです。これは問1)で見たように学生のみなさんが積極的に21世紀教育の重要性や意義を理解・評価していないことと関係があるのではないのでしょうか。今後検討しなければならない課題です。

問9) 基礎教育科目では、履修制限を避けるために、授業によって履修者が大人数(例えば150名以上)に上る場合があります。これについてどう思いますか。

1. どれだけ大人数であっても履修制限を受けるよりはよい。
2. 多くとも150名くらいで履修制限すべきだ。
3. 100名くらいで履修制限すべきだ。



どれだけ大人数であっても履修制限を受けるよりはよいは70.0%を占め、大多数が人数による履修制限に不満を持っているようです。「150名で履修制限」は17.5%、「100名で履修制限」は12.5%でした。受けたい科目を受講できないということは学生のみなさんにとっては大変な不利益で、引き続き来年度以降も、必要と考えられる開講数の整備や、時間割の組立などの工夫を重ね、履修制限を受ける人が1名でも少なくなるように、努力を重ねて行く必要があります。

平成15年度前期2年生に対するアンケート調査結果の概要

2年生では今年度の2年生前期から新たに開始されたコア・テーマ科目と反復履修及び履修人数の制限に関する意識を調査し、コア・テーマを学生のみなさんがどのように評価しているかその実

態を把握することに焦点を当てて行われました。

以下にその概要を示します。

< 所属について >

問1) あなたの所属学部・学科・課程などは次のどれですか。

学部	人文学部	教育学部	医学部	理工学部	農学生命科学部	計
配布数	347	250	290	311	181	1379
回答数	213	149	118	165	102	747
回答率	61.4%	59.6%	40.7%	53.1%	56.4%	54.2%

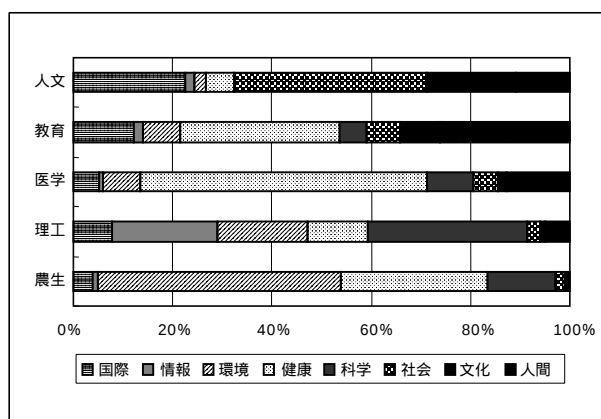
配布枚数は1379、回答数747、回答率の平均54.2%です。平成14年度前期の回答率が38.7%、後期の回答率が69.7%でしたので、昨年度前期より約15ポイント上昇しましたが、後期より逆に約15ポイント低下しました。また、1年生の84.4%に比べて30ポイントも低い回答率でした。回答率が低かった要因は、2年生の全員が21世紀教育科目を履修したわけではないこと、或いは履修しても科目数が少なかったために関心が薄かったこと、などが関係していると考えられます。

< コア・テーマと領域の選択について >

問2) あなたがコア・テーマとして選んだテーマ領域はどれですか？

1. 国際
2. 情報
3. 環境
4. 健康
5. 科学
6. 社会
7. 文化
8. 人間

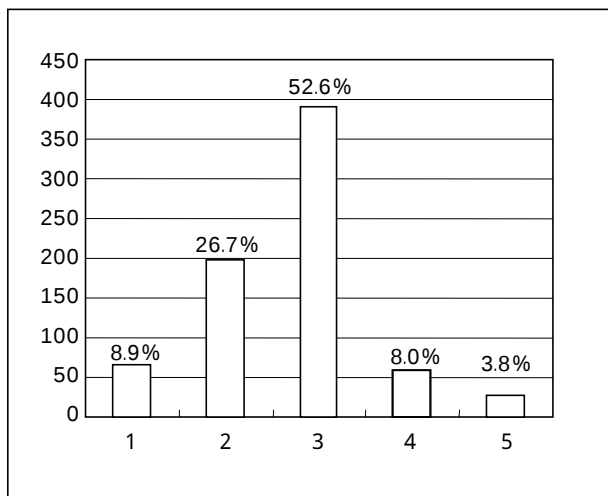
	国際	情報	環境	健康	科学	社会	文化	人間	計
人文学部	48	4	5	12	0	83	38	23	213
教育学部	18	3	11	48	8	10	12	39	149
医学部	6	1	9	68	11	6	2	15	118
理工学部	13	35	30	20	53	4	2	8	165
農学生命科学部	4	1	50	30	14	2	0	1	102
回答数	89	44	105	178	86	105	54	86	747
回答率	11.9%	5.9%	14.1%	23.8%	11.5%	14.1%	7.2%	11.5%	



各学部別に見ると人文学部は「社会」、教育学部は「健康」、医学部は「健康」、理工学部は「科学」、農学生命科学部は「環境」を選択した割合がそれぞれ最高になりました。やはり、自分の専門に近い領域を選択する傾向があるといえるのではないのでしょうか。領域別では、「健康」を選んだ人の割合が最も多く、最も少なかった「情報」と約4倍の開きがありました。「健康」が特に多かった理由として医学部の約60%が集中したことが考えられます。

問４）あなたが選んだコア・テーマは有益だったと思いますか？

- １．非常に有益だった。 ２．かなり有益だった。
- ３．ある程度有益だった。 ４．あまり有益でなかった。
- ５．ほとんど有益ではなかった。

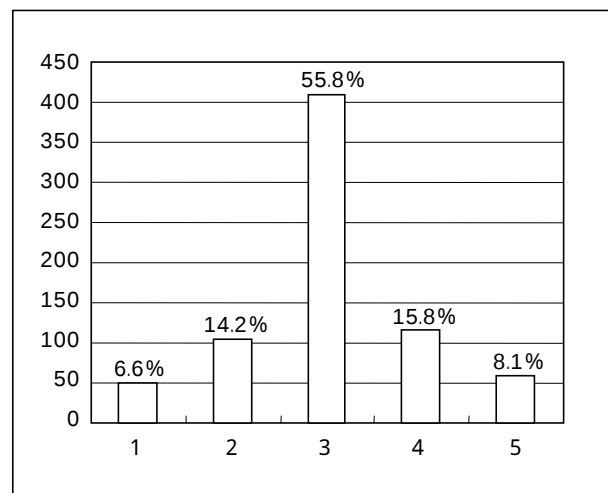


非常に有益だった（8.9%）、かなり有益だった（26.7%）、ある程度有益だった（52.6%）とほとんどの人（88.2%）が有益と感じたようです。

< 昨年度（平成14年度）後期のテーマ科目について >

問６）上の問で選んだテーマ科目は、あなたが今年度コア・テーマを選択する上で参考になりましたか？

- １．非常に参考になった。 ２．かなり参考になった。
- ３．ある程度参考になった。 ４．あまり参考にならなかった。
- ５．ほとんど参考にならなかった。



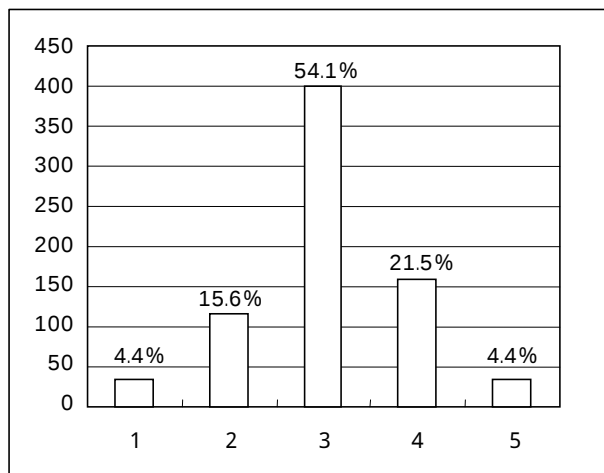
非常に参考になった（6.6%）、かなり参考になった（14.2%）、ある程度参考になった（55.8%）と、全体の3/4以上（76.1%）が昨年度選んだテーマ科目を参考にして、コア・テーマを選択しました。

< コア・テーマ全体について >

問７）２年次に集中して履修するコア・テーマは、「深い教養」を養成する目的のために設定されたものです。

この履修システムについてどう思いますか？

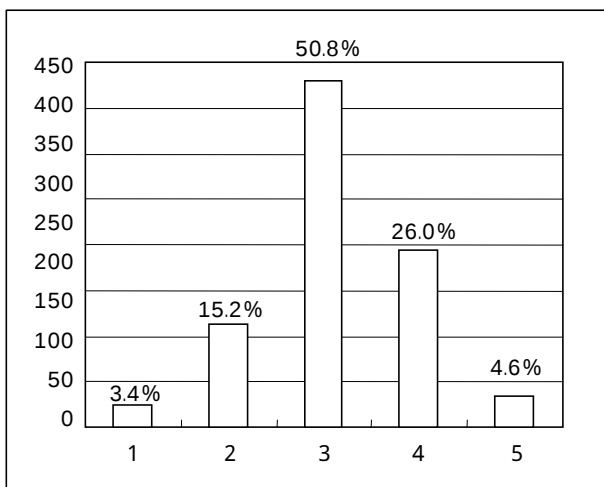
- １．非常に良いシステムだと思う。
- ２．かなり良いシステムだと思う。
- ３．ある程度良いシステムだと思う。
- ４．あまり良くないシステムだと思う。
- ５．非常に良くないシステムだと思う。



非常に良いシステム、かなり良いシステム、ある程度良いシステムと感じた人は74.1%を占め、大多数がこのシステムを評価しているようです。ただ、ある程度良いが全体のほぼ半数の54.1%を占め、あまり良くないとした人も5人に一人（21.5%）であったことから、高く評価されているとは考えがたく、今後、学生みなさんにコア・テーマの趣旨をより深く理解してもらうよう、さらに検討・改善が必要です。

問８）テーマ科目の履修条件に、コア・テーマとして選択した領域から４科目８単位履修すると定められていますが、科目数４についてどう思いますか。

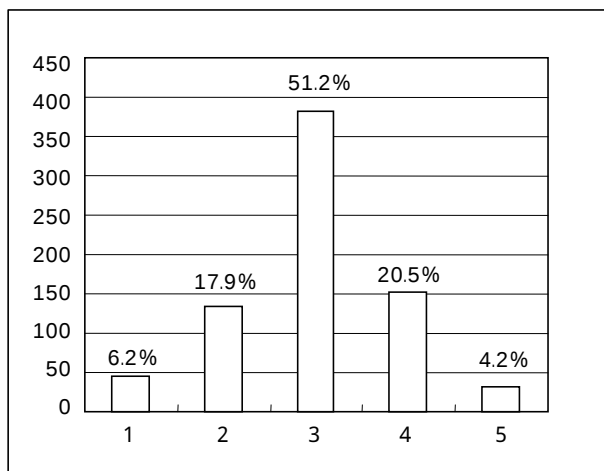
- １．非常に良い。 ２．かなり良い。
- ３．ある程度良い。 ４．あまり良くない。
- ５．非常に良くない。



非常に良い（3.4%）、かなり良い（15.2%）、ある程度良い（50.8%）を合わせて肯定的意見は69.4%でしたが、あまり良くないと感じた人も4人に一人（26.0%）いました。今後さらに調査の継続が必要です。

問9) テーマ科目の履修の条件に、コア・テーマ以外の異なる4つの領域から2単位ずつ8単位履修すると定められていますが、どう思いますか。

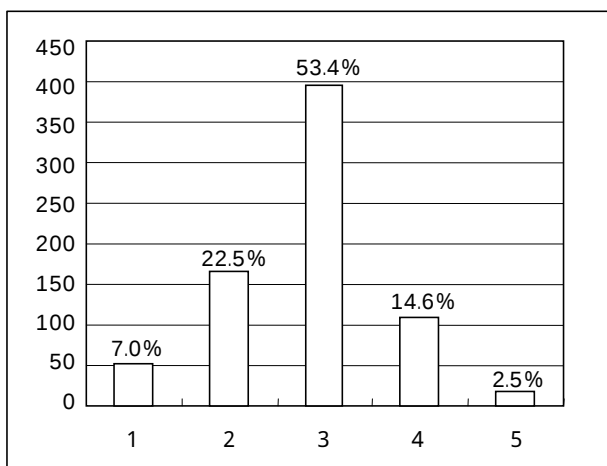
1. 非常に良い。 2. かなり良い。
3. ある程度良い。 4. あまり良くない。
5. 非常に良くない。



非常に良い(6.2%)、かなり良い(17.9%)、ある程度良い(51.2%)と肯定的意見は75.3%でしたが、あまり良くないと感じた人も5人に一人(20.5%)いました。今後さらに調査の継続が必要です。

問10) テーマ科目の領域として8領域設定していますが、どう思いますか。

1. 非常に良い。 2. かなり良い。 3. ある程度良い。
4. あまり良くない。 5. 非常に良くない。



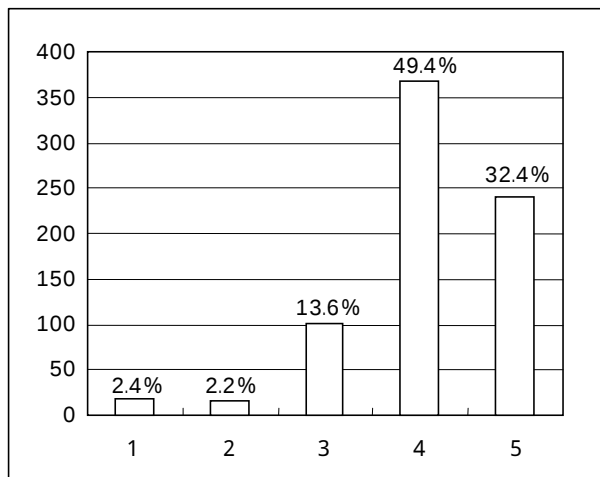
非常に良い(7.0%)、かなり良い(22.5%)、ある程度良い(53.4%)を合わせて82.9%が8領域を評価しています。今後さらに学生のみなさんの要望を取り入れて、一層の改善に努める必要があります。



<その他>

問11) 21世紀教育では、副題・内容が異なっている場合でも、授業科目が同じであれば、同一授業の反復履修禁止と規定しています。同一授業の反復履修禁止をどう思いますか。

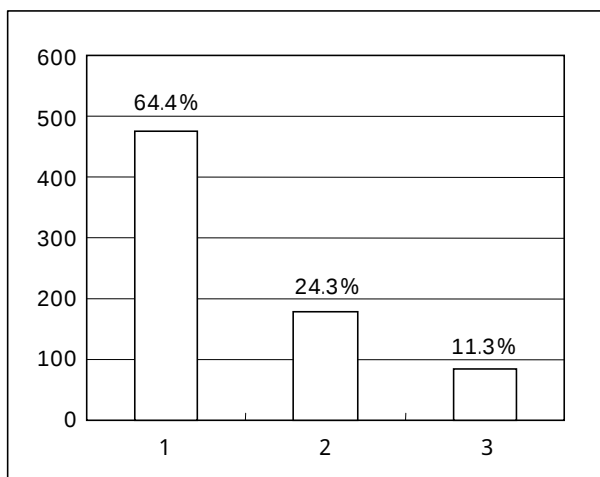
1. 非常に良い。 2. かなり良い。 3. ある程度良い。
4. あまり良くない。 5. 非常に良くない。



あまり良くない、非常に良くないとする人が全体で81.8%を占めました。農学生命科学部と理工学部で74.0-77.6%と若干低く、その他の学部では84.5-85.5%でした。1年生(60.5%)に比べて反復履修を不満と感じる学生のみなさんの比率がさらに増加していました。1年生のところで触れたように、今後検討して行かなければならない課題です。

問12) 昨年度は、基礎教育科目・テーマ科目で適正なクラス編成をするために、履修者が大人数(例えば150名以上)に上った場合には、履修制限を行いましたが、今年はその制限を廃止しました。これについてどう思いますか。

1. どれだけ大人数であっても履修制限を受けるよりはよい。
2. 少なくとも150名くらいで履修制限すべきだ。
3. 100名くらいで履修制限すべきだ。



どれだけ大人数であっても履修制限を受けるよりは良いは64.4%を占め、大多数が人数による履修制限に不満を持っているようです。「150名で履修制限」は24.3%、「100名で履修制限」は11.3%でした。傾向は1年生とほとんど変わらず、履修制限をすべきと考える人の比率は増加していないことから、履修制限の廃止は学生のみなさんに肯定的に受け入れられたことがわかります。

特集「語学を考える」

平成15年度はFD・広報専門委員会の企画で、山口大学から講師をお招きして午前は講演、午後は弘前市内の高校教員と学内の同僚が参加して21世紀教育の英語教育を考えるフォーラムディスカッションを行いました。その詳細は別紙の報告書に載せられていますが、ここでは改めて他の言語も加えて、そもそも21世紀教育の語学教育が学生の期待に応えるものとなっているか、もしも問題があるとしたらどのような点に理由があるか、に関して担当者と受講者それぞれに率直な意見を語ってもらうことにしました。



弘前大学の英語教育は何を目指して進んでいるのか

教育学部英語科 奥野 忠徳

英語コミュニケーション実習は、従来の「共通教育英語」を引き継ぐ形で発足したが、それを徹底的に分析し、その分析・反省に基づいてコンセプトを形成していった。準備段階では、次のような問いを発することから始まった。英語の授業で何を教えるか？いかにして英語を必要と感じさせるか？いわゆる「英語難民」への対策も必要ではないか？音声訓練が必要なのではないか？能動的に自分の考えを英語で表現する力をつけさせるにはどうすればいいか？外国語の授業は習熟度別に行われるほうが効率的であると言われているが、習熟度別授業は弘前大学で可能だろうか？可能であるとしても、低いクラスに振り分けられた場合、勉学意欲の低下がないだろうか？レベルを自己申告とするか、それとも何らかの客観的基準を使うか？センター試験を使うとすれば、センター試験を受けずに入学してくる学生をどう振り分けるか？さらに、成績評価についても過去のデータを綿密に分析した結果、担当教官による評価があまりに落差がありすぎる事が判明したので、これを克服して公平な評価基準をどう策定するか？等等である。新しいコンセプトは、これらすべての問いへの解答となっているのである。そして、その解答は、学生のアンケート結果や担当教官の意見等からも概ね正解であったようだ。

もちろん問題もいくつか積み残されている。例えば、レベルの数は現在4つであるが、果たしてそれでいいのか？前期の習熟度別クラス分けは、センター試験の英語の点数をもとに行っているが、さらに改善の余地がある。また、後期のクラス分け方法についてはさらに改善しなければならない。16年度後期には、待望のTOEICコースを試行的に開講する。これによって、弘前大学の学生の英語力がさらにレベルアップしてくれることを願っている次第である。



ドイツ語教育の現状と進むべき道

人文学部 原田 悦雄

昨年度の前期末にドイツ語受講者に向けて独自のアンケートを行った。その結果として判明したのは、特に二つのことがドイツ語受講理由として目立って多く挙げられていたことであった。すなわち「シラパスを読んで」と「ドイツ文化に興味があった」がそれである。

シラパスは私が作成しており、主としてドイツ語が近

代以降の日本における学問語であること、色濃く祖先の言語の特徴を伝えていること、等を書いてある。このこと自体には何らの誤りはなく、習得した暁には履修者も納得がいくと思われる。また、言語そのものが文化を映し出すものであること、担当者によっては別に視聴覚機器を使ってドイツ文化の紹介をしたりして、学生の期待に添うべく努力していること等が背景にあるのだろうか、ドイツ文化に興味があって受講した学生も一応の満足をしたことがアンケート結果に表れていた。但し子細に見ると、様々に改善の要ありと担当者の一員として思わざるを得ない点がある。

周知のように英語が国際的言語となっている現在、それ以外の外国語を学ぶ意義は揺らぎつつあるように見える。とりわけ学生の間には、大学のカリキュラムに組み込まれているために否応なく学習せざるを得ない、という受動的な姿勢が見てとられる。それが後期になってさらに上のレベルに進む履修者が極端に減少していることにつながっている。このことは、単にドイツ語のみに限らないのだが、今一度高等教育における英語以外の外国語教育の意義を明らかにする必要に迫られていることを告げている。

ドイツはEU加盟国の東欧拡大につれて、当初は単純にドイツ語学習者が増大すると期待した節がある。しかしロシア語に代わったのは英語であり、様々の学習上の経済援助にも拘わらず、ドイツ語学習者は期待以上の増大を見なかった。英語対母語という関係にある限り、力の強い英語に一方的な浸食を受けるだけであり、母語が歴史的に培ってきた母語話者国のオリジナリティが希薄になっていくのは当然である。自国の文化、ひいては文化の多様性を維持するのは英語に加えて第三の言語、それもコンタクトを密にする近隣の言語を学習するに如かず、とする考え方が「多言語主義」であり、本学の21世紀教育多言語コミュニケーション実習もその考えに則って実施されている。ドイツも含めたヨーロッパ諸国は近隣国相互に多言語主義の学校教育を展開しているところでもある。

教育方法も言語の総合的学習というよりは実践的側面、すなわち話す・聴く能力の開発に主眼をおいたものになっており、それに現在のお国事情紹介を絡ませる体裁になっている。ドイツで出版されている「外国語としてのドイツ語」教科書から読み取れるのは、おおよそのことである。即座のコミュニケーション能力を必要とする場合がほとんどである英語と比較した場合、この傾向はよく首肯できることである。要するにかつて「読解」の名の下にドイツの名作を精読した「中級」の類は多言語主義の入門段階にあっては適切ではない、読解は必要とする専門教育に委ねられるべきであるとする考えが窺われる。21世紀教育多言語コミュニケーション実習にとってもこうした実情を無視するわけにはいかないと考える。

以上のことを念頭において現在の本学ドイツ語教育を見た場合、バランスは未だに将来の学部教育に必要とする専門書の読解を容易ならしめる授業に傾いていると思わざるを得ない。しかし将来の専門教育にドイツ語を必要とする学部は人文学部を除いてどこにあるだろうか。大学院入学試験に第二外国語を課している学部は、真面目にその必要性を考慮しているのか疑わしい。21世紀教育に実践的な外国語能力開発を導入するには、英語を範にしなければならないのである。日本には幸いなことに「独語検定試験」というドイツ語能力を客観的に測るリトマス試験紙が存在する。達成目標にこの試験を標準にしたシラバスも作成している。しかしながらこの目標に向かって担当者は鋭意努力すべく共通認識が未だ不足している、と自省を込めて言わざるを得ないのが遺憾である。後期から「会話・作文」を内容とするレベルⅡBを担当するネイティブ教官がもたらす「また最初から文法のイロハを教えねばならない」という嘆きがそれを物語っている。



一年生のフランス語を担当 してみて

外国人教師 ミシェル・ジャンソン

全学対象の一年生のフランス語の授業を担当して5年になります。各学期の授業プログラムは、フランス語担当者全員で検討して決められますが、そのとき基本方針がまず話し合われ、その基本方針によって、学生たちが学ばべきフランス語の基礎の中身が決定されます。フランス語の基礎とは、文法、発音、読解、会話の聞き取りであり、特に最後の聞き取りでは、日常話されているフランス語の典型的な各種の表現が学ばれていきます。

授業はいくつかの部分にわけられます。教科書の各課の紹介、文法事項等の説明、練習問題、発話練習(2・3人での学生同士の会話)、教科書に出てくる会話の聞き取りや文章の読解などです。こうして見るとやるのがたくさんありすぎるように見えるかもしれませんが、それらを達成したときの満足度には十分なものがあり、また学生のそうした感想もよく耳にします。逆にいうと、欠席が多い学生はこうした豊富な授業内容を十分に活用できないということになります。

後期では、フランス語のさらに深い理解が目指されています。授業は、より複雑な文法事項、フランス語の生の資料の読解と理解、さまざまなコミュニケーション能力(好み、家族、出身地などについて話す)の修得に当てられます。

各学期とも試験によって評価がなされますが、そのときに課される成績評価の仕方は非常に恣意的で不公平であると思います。なぜなら、教える側にとっては、その学生が本来獲得した点数を与えることができないからです。たとえば、本当だと2点減点に値する間違いが場合によっては20点分の減点となることがあり、学生に不利益をこうむらせることになりかねないからです。これは大学という教育の場にあっては、不公平であり、とりわけ受け入れがたいことではないでしょうか。授業の3分の2以上出席しなかった学生が試験を受けられない(これはまったく当然のことです)のが当たり前のように、学生が自分自身で獲得した点数を与える権利を教える側に保証することは当然のはずです。

最後に、講義室はとても手入れが行き届いていて、設備もよく完備されていると思います。学生たちはこうした環境の中で、はじめて快適に、やる気満々で勉強できるのだと思います。



力となる中国語を

外国人教師 楊 天 曦

中国語の授業は、全学向けの21世紀教育と人文学部の外国語実習という二つのシステムで行われています。そして、さまざまな専門の学生の中国語への熱意に答えられるように調整されつつある中、いかに中国語を効果的に身に付けさせるかが、授業を考える上での重要なポイントになっています。その根底には、従来の文法学習と読解を中心とする教育法と、表現の問題を意識した語学教育の両方が求められている、という共通の認識があると思います。

中国語と日本語の漢字はほとんど同じ意味を持つ。語彙レベルでの中国語読みとりの習得はとてもはやい。しかし、それは中国語を「学ぶ」ことの一部を意味する。理解(読みとり、聞き取り)と表現(作文、話す)が一体になって、はじめてより複雑なコミュニケーションが実現される。言葉の習得を建造物に例えれば、理解と表現の両方の力をアップさせなければ、バランスのとれた建物はたてられません。この見地から中国語の授業を進めていきたい。

学生のみなさんへの提言です。

現在、弘前大学にはおよそ80名の中国人留学生が在学しています。この好条件を生かし、積極的に彼らと関わる機会を作り、会話練習をしながら情報交換し、言葉の背景にあるものを広く知ること。そして、卒業後の進路を意識した上で、言葉を勉強すること。

もちろん、まずは興味から入り、言葉を学ぶ喜びが感じられることが、みなさんにとって一番大切です。それと同時に、習得の目標設定もとても重要です。短期の目標として、たとえば検定試験の合格を目指すことによって、自分がいま到達できたレベルを確認すること。それによって次の目標を見つけること。一つ一つクリアしていく。そういう満足感が味わえる中国語学習が望ましい。

大学生活を楽しく、豊かにしてくれる中国語、将来の道を見据えた上、生きる力となってくれる中国語を身に付けてもらうために、一緒に努力していきたい。



英語コミュニケーション実習 を受けて

人文学部2年 島 和 佐

今振り返ると、英語を習っているというよりは、その場において質問に答えているという感じでした。それほど難しくはなかったのです。

英語コミュニケーション実習はAとBに分かれているため、科目ごとに述べたいと思います。Aは英語が母国語の先生が担当で期待通りの内容でした。授業時間内は全て英語、この時間を持てたことが良かったです。日本人の

先生からは聞くことのできない異文化の違いも同時に学ぶことができました。Bは主に英作文の時間でしたが、課題があまりありませんでした。宿題が好きとか日本人の先生が担当だったからではなく、英作文はある程度時間をかけて取り組むものなので、あまり授業自体に期待はしていませんでした。しかし、英語III BとII Bの先生はお二人とも熱心に生徒の声に耳を傾けていらっしゃいました。

期待したものは、主にBに関して、英文作成上の注意点と書き方でした。日本語で書く文章とは構成が違うため、どのように英文を書くのかを知っておくことは、非常に僕にとって重要でした。英語を読んだり聴いたり話したりできることは素晴らしいことですが、書くことができれば、遠くにいてすぐには会えない友人にEメール又は手紙を送ることができます。逆に言えば、この時に英文作成の注意点と書き方が必要になります。僕は今、アメリカに高校時代のホストファミリーがいて、図書館で関連の本を調べ、それを用いては手紙を書いています。難しいことは一切書かず、自分の生活について書きます。

レベルが異なる授業で行われているかもしれませんが、英文をある程度書けるようになることで、話すことや読むこととは違った英語の楽しみ方があると思います。そのために今後、英語コミュニケーション実習において別の講義が開講されることを望みます。



ドイツ語を学んで

文学部1年 吉田 晃 基

私は一年生の前期に、二十一世紀教育科目の「多言語コミュニケーション実習」でドイツ語を選択しました。ドイツ語を選んだ理由は、ドイツ語の発音がとてもかっこ良かったということもありますが、本当の理由は次の通りです。まず私は西洋史が好きで、何かヨーロッパについて勉強したいと思った時に、歴史的に見るとヨーロッパの中心はドイツであると考えたこと。それと私はクラシック音楽が好きなのですが、その中心地はドイツとオーストリアで、どちらもドイツ語圏でした。それで、ある国の文化を知るにはその国の言語を学ぶ必要があると考え、この言語を選択したというわけです。

さて、私が受講した「ドイツ語」を担当してくださった先生の講義はとてもよく解る内容のものでした。質問があるかどうかを頻りに聞いてくれるので、授業の途中で質問するチャンスがかなりあって自分としても良かったし、手を挙げるのが苦手な学生にとっても助かったのではないのでしょうか。そして何か解らない所があって質問すると、解るまでかなり詳しく教えてくれました。また、文法や単語によってはその語源に遡って説明してくれたり、ドイツ語の祖先であるゲルマン語についての話をしてくれたり、かなり興味深い内容に発展することもありました。それから、この講義で使用していた教科書に関してですが、とてもカラフルで本文も親しみやすい内容であり、初学者向けの入門テキストとしては適切な教材だったと思います。ただ強いて挙げるとすれば、やや誤字の多いテキストであったことが言えます。だがこれは、ドイツ語の新正書法への移行のために作業が難航したためとも考えられるので、多少止むを得ない所もある

のかもしれませんが。

一年生の後期には「外国語実習」に進み、「多言語」は半年だけの受講だったので問題点らしい問題点は見つけれませんでした。一つ思ったことは、人数制限のために自分の学びたい言語を選択できない学生が結構いたということでしょうか。やはり自分の学びたい言語を必ず選択できるようにすべきだと思います。



フランス語コミュニケーション実習における問題点と方向性

農学生命科学部1年 熊井 智 美

私は1年生の前期でフランス語Iを、後期でフランス語IIのA、Bを履修していました。簡単な会話と文法を学びながら友達とフランス語で会話を実践したり、ゲームをしながら発音を確かめたりできる授業です。私は学ぶときは教える側と教わる側のコミュニケーションがとても重要だと思っています。特に言語を学ぶ授業は一方通行の授業では身につかないと思います。教科書を読むだけでなく参加型の授業はフランス語の面白さを知る事ができ、能動的に授業に取り組む事ができました。しかし私の友達の中には多言語に興味を持てずに単位を取る目的で受講している学生もいるのです。授業に対する学生自身のモチベーションが低いことが原因でもあります。多言語のみに関わらず教養科目に対しては一般的に学生の興味が薄いのかもかもしれません。しかし専門知識に偏った勉強の仕方は就職し社会に出た時に視野を広く持てないように思います。実際に私はフランス語を習ったきっかけでフランスの文化や歴史に興味を持つようになり、最近はフランス映画をよく見るようになりました。ビデオを借りる時も字幕版を借りてきて、知っている単語が聞き取れるかやってみたりしています。今までよりも興味の幅が広がり、新しいことを知る事が楽しいと感じるようになりました。語学を習得するには時間と努力が必要です。短期間集中的に学んでも継続しないとすぐに知識が抜け落ちてしまいます。努力と言うとつい力んでしまいがちですが、頑張り過ぎず楽しみながら学ぶ事が言語学習のポイントだと思います。また現在多言語はIを取れば卒業単位を満たしますが、可能であればより多くの人がII・IIIとステップアップしていくべきだと思っています。そう思えるような授業作りを先生方と私たちが常に意識しながらいけたらいいなと思っています。



中国語を学んで

文学部1年 佐藤 恵

中国語を勉強し始めてもう九ヶ月になります。去年録画してたまった、NHK教育テレビ中国語講座のビデオを観ていると、九ヶ月の間にこんなに勉強したんだなあとあらためて実感します。自己紹介に始まり、現在では中国語独特の表現方法を勉強しています。チンブンカンブンだったリスリングも、授業でのトレーニングとNHK中国語講座のおかげで、聞き取れるようになりました。

コミュニケーションの授業では、「話す」ことに重点を置いています。配布されるプリントを使って、色々なシ

チュエーションに基づいた会話練習ができました。また、ネイティブの先生の中国語に当初は圧倒されましたが、生きた中国語に触れることができ、とても楽しく授業を受けることができました。

以前は、中国語の発音はその辺のただの「音」でしかなかったが、学習していくことによって、意味が分かるようになりました。今度は話してみたい、中国の文化に触れてみたいという思いがいつそう強くなりました。しかし、いざ会話をしようとする、単語が浮かばなかったり、漢字は思い出せるのにピンインや四声がめちゃくちゃだったりして、とても悔しい思いをしました。この悔しさをバネにして、話す力と文法の力を確実に高めていきたい。

去年の十一月、中国語検定の準4級を受けました。猛勉強の甲斐があって、合格することができました。目に見える形で自分の中国語の上達ぶりが分かるので、さらにやる気が湧いてきました。今、三月にある4級の検定試験に向けて頑張っています。

将来の夢は、私の中国語で、中国の人を本気で笑わせたり、怒らせたりできるようになることです。それができて初めて本当の「コミュニケーション」だと私は考えています。中国語は私の世界を広げてくれました。今後は、中国語という媒体を使って、中国の伝統や流行、食文化など、あらゆる角度から中国という国を見ていきたいと思っています。

「FD研修合宿」体験記



理工学部数理システム科学科
榊 真

平成15年11月7日(金)～8日(土)に北海道奈井江町奈井江温泉で行われました第6回北海道大学教育ワークショップ(FD研修合宿)の体験報告を致します。21世紀教育センター運営委員になって最初の仕事がこの出張でした。主催は北海道大学高等教育機能開発総合センターで、参加者は北大の各学部の教官が34名と最も多く、北大以外からは8名で、全体で世話人等も含めて約50名でした。弘前大学からは同じく運営委員の稲村先生(理工学部)も参加されて今回の写真を提供していただいています。

今回の研修はFDに関するレクチャーを受けるだけでなく、非常にアクティブな実習形式が取り入れられており、その様子を順を追って紹介していきたいと思います。

7日の朝に北大に集合してバスに乗り、自己紹介をしながら1時間ほどで奈井江温泉ホテル北の湯に到着し、休む間もなく研修が始まりました。午前中は北大総長の講演と、研修のオリエンテーションとなるミニレクチャーがありました。午後からが本番で、今回のテーマである「授業の設計」に関するミニレクチャーがあり、それに引き続き60分間のグループ作業Ⅰが始まりました。8人ほどの5つの小グループに分かれて、それぞれのグループに与えられたタイプの全学教育科目を議論しながら設計し、シラバスを作成してゆくという形式でした。私の所属するグループには一般教育演習「異文化理解を深める科目」が与えられ、最初の作業「科目名・目標の設定」を行いました。その後、発表・全体討論がありました。休憩の後、再度ミニレクチャー＋グループ作業Ⅱ＋発表・全体討論があり、今度は、作業Ⅰで設定した科目の「授業内容の設計」が課題でした。

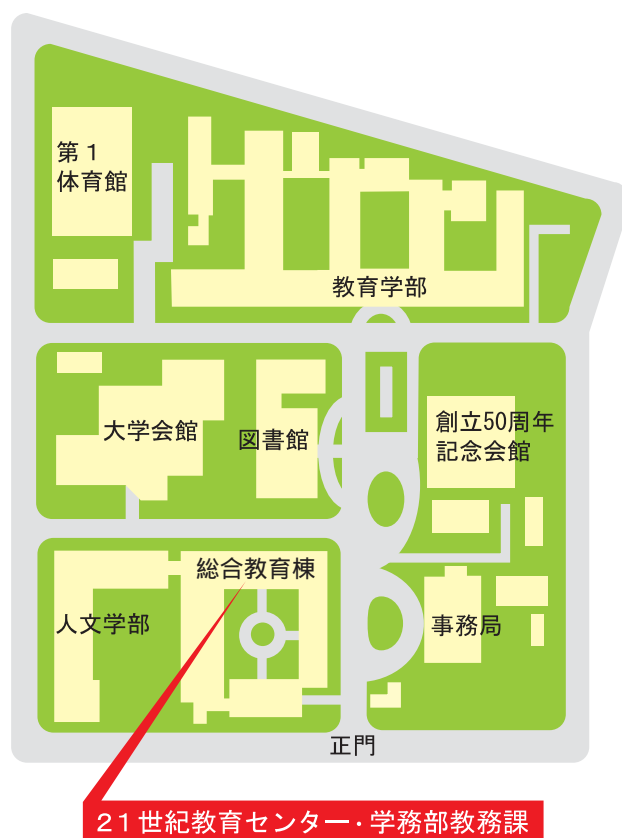
6時過ぎに1日目の盛りだくさんの研修が終了し、ようやく温泉に入ることができました。7時過ぎから夕食、8時半ごろから懇親会になりました。

2日目の午前はミニレクチャー＋グループ作業Ⅲ＋発表・全体討論から始まり、「成績評価方法の設定」を行い、シラバスを完成させました。その後、特別講師によるデモンストレーション授業ⅠとⅡが昼食をはさんで行われ、研修が終了しました。バスの出発の時間まで各参加者の感想や意見などが述べられ、バスに乗り札幌に戻って解散となりました。

今回の研修で、シラバスに対するいろいろな考え方や視点を学ぶことができたと思います。特に、1つのシラバスを議論を積み重ねながら共同で作り上げるという作業が、自分にとっては非常に新鮮なものでした。また、普段あまり話をする機会がない分野の人たちと議論や交流ができたことも貴重な体験でした。今回の体験を何らかの形で今後の教育研究に役立てていくことができればと思います。



表紙デザイン 教育学部 佐藤光輝氏



弘前大学21世紀教育センター

〒036-8560 弘前市文京町1番地（総合教育棟内）

事務担当 学務部教務課専門員

TEL : 0172-39-3104

E-mail : jm3104@cc.hirosaki-u.ac.jp

教務係

TEL : 0172-39-3106

E-mail : jm3106@cc.hirosaki-u.ac.jp